

## 狂言の練習を通じてクラス作りを！（6年生）

子どもたちは、狂言発表会に向けて、どんどん演目の仕上げを行っているところです。子どもたちは、自分の担当のところは、セリフも覚え演じられるようになりました。

しかし、そこで満足してはいけません。狂言開きでも教えていただいたように、**狂言はルー形式で行われます**。自分のところだけを演じる（という気持ち）のではなく、**チームとして演じることが重要**になってきます。観客に、『附子』や『柿山伏』のストーリーを、不自然でない状態で届けていくことが重要です。そのためには、**自分が担当している登場人物の心情を、自分の場面だけ考える（解釈する）のではなく、最初の場面から最後の場面まで途切れることなく伝えていくことが大事です**。それが、『リレー形式』とか『チームとして』と言われる所以です。

6年生の子どもたちには、練習の際から、自分のところだけという意識ではなく、仲間とともに狂言を仕上げるという意識をもちながら仕上げていってほしいと思います。

子どもたちは、狂言練習の初期はセリフを覚えるのにやっとなで友だちの演技にアドバイス等意見をもつことは難しかったと思います。しかし、**狂言発表会を間近にした今だからこそ、仲間とアドバイスをしながら自分たちの狂言を仕上げるができると思います**。小学校生活最後のこの時期に、狂言学習を通して、**仲間づくりの面においても仕上げをしていってほしいと思います**。

### 山口耕道先生のご指導より

言葉（セリフ）は心配ないです。あと仕上げたいところは・・・。

言葉をいかに聞いている人に届けていくかが重要です。言葉をゆっくり丁寧に発声しましょう。

役になりきろう。留守番をする時の気持ちになって言葉を発しよう。留守番は不安？それとも楽しみ？



常に『附子』を意識するように。『附子』は「向こうから吹く風に当たってさえ、滅却するほどの大の毒」と言われている。とても恐ろしい物であるので、常に気にしているように演技をするように。

『附子』に対する恐怖感の表現は、振り向き方でも違ってきます。『附子』に背中を向けるか向けないか。

「そりゃ退け、そりゃ退け」で、空気が一変する。立ち方がポイントになる。

狂言は伝統芸能だが、決まっていると思わないように。表現の中の間のとり方や動き方は自由です。楽しんでください。

ポンと手をついて素早く立つ。瞬時に変える空気感を表現できるといい。



# おもしろい！独特の雰囲気を作り出しています！

練習の度に、質問をしたり、ペアで相談したりと、前向きに狂言練習に取り組んできた子どもたちです。『練習は嘘をつかない！』です。



友だちが山口先生の指導を受けている間に、一緒に先生の真似をしながら練習をしています。



おもしろい！好きや！独特の雰囲気をもっている。このムードを生かして、ほのぼのとして笑いが起こると思う。

「離<sup>せ</sup>というに。」「なら<sup>ん</sup>というに。」太郎冠者と次郎冠者のセリフのリズムを合わせるのがポイント。

よくここまで（演技を）仕上げてきたなあ。おもしろい！

食べようとしているものがそこない。その工夫を表現する。



間をつくる。  
言葉がないと、何？  
何？何？となる。  
観客の心をつかむ。

《行間を読む》

何も書いてないところを読む。言葉と言葉の間を読む。演じている側にとっても観ている側にとっても想像している。

ここまで仕上げているので、これ（行間を読む）ができるように思う。



猿唄は、気持ちを集中させる（とぎすませる）。みんなが一方向に整列し見えないけれど、みんなの気配を感じて唄う。34人でできたと思う瞬間をめざしてほしい。

- 狂言を思い切って演じる。
- ふだんの自分ではない役になりきる（役をつくる・変身する）。
- 必ず自分のセリフを聞いてくれる人がいるということを忘れてはいけない。
- 聞いてくれる人に、言葉を届けるようにする。観客は、聞こうと思って来てくれている。それに 乗っかって、自分のセリフを届くようにする。
- 伝えようと思ったことを、相手（観客）は聞いてくれる。観客は反応して返してくれる。
- 聞こうと思う人を裏切らない。
- 自分（演技者）が何かをやった分、同じ分だけ（観客から）返してもらえる。それを体験してもらいたい。